



受賞者一覧

第1回史学会賞

このたび史学会では史学会賞の選考を行い、以下のお2方が第1回史学会賞受賞者に決定いたしました。

2014年11月8日（土）に開催されました第112回史学会大会総会において受賞者が発表され、併せて授賞式が行われました。



受賞者

後藤 はる美 氏

受賞論文

「17世紀イングランド北部における法廷と地域秩序
——国教忌避者訴追をめぐって——」
『史学雑誌』第121編 第10号（2012年10月発行）掲載

受賞者略歴

(現 職)	東洋大学文学部史学科講師
(最終学歴)	ケンブリッジ大学歴史学部博士課程修了 東京大学大学院人文社会系研究科単位取得退学
(学 位)	Ph.D(History)
(主な業績)	'Charges to the Grand Jury in Seventeenth-Century England', D. Bates & K Kondo (eds.), <i>Migration and Identity in British History</i> , Tokyo, 32-41, 2006-12.

選考理由

後藤はる美氏の論文は、17世紀初頭のイングランド北部ヨークシャー州における社会秩序の形成過程を、地域エリートたちが繰り広げた政治的・文化的なヘゲモニー争いに注目することにより解明したものである。

議論の主な対象は、イングランド王国臣民に課せられた国教会信仰の遵守を争点とする法廷での争いであり、後藤氏は直接の史料が残っていないという制約を乗り越えて審理過程を詳細に再現するかたわら、ヨークシャー州の地域社会、訴訟当事者たちの行動様式、さらに実際の訴訟が開始されるまでの手続きなどの法廷闘争の背後事情にも分析の目を向けている。そこから浮かび上がってきたのは、最終的に法廷で国教忌避という「犯罪」が確定されて新たな社会秩序が整えられるまでには、国家の定めた成文法の運用をはかる勢力と、地域社会の文化的コードの活用をはかる勢力との間にダイナミックな相互作用があった、という事実である。

本論文は、種々の次元における史料の慎重かつ緻密な読み、先行研究との深い見取り、重層的な論理構成、そして冷静な分析と叙述など、多くの点で文字通りの力作かつ力作であり、第1回の史学会賞にふさわしいものである。

本論文では個別の世界を対象とするが、今後は地域社会の秩序システムが、1640年代のイングランド革命期のような全国的な動乱期にどのように揺れ動き、再編成されていったのか、あるいは同時代のフランスのような別個の原理に根ざした政治社会の秩序システムとはどのような異同があるのか、といった問題などにも議論の射程をのばし、さらに研究を進められることを期待したい。

[このページのトップへ ▲](#)

受賞者

城地 孝 氏

受賞論文

「明嘉靖馬市考」
『史学雑誌』第120編 第3号（2011年3月発行）掲載

受賞者略歴

(現 職)	京都大学人文科学研究所非常勤研究員
(最終学歴)	北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了
(学 位)	博士（文学）
(主な業績)	『長城と北京の朝政——明代内閣政治の展開と変容——』（京都大学学術出版会、2012年）

選考理由

城地孝氏は、明代の嘉靖・隆慶年間（1522-66、67-72年）を対象とする政治史研究で研鑽を積み重ねており、本論文はその一環に位置づけられる。なお本論文を含む2004年以降の研究成果は、著書『長城と北京の朝政』にまとめられている。

明代後期を対象とする政治史研究では、東林派を扱った溝口雄三氏と小野和子氏の研究を除くと、内閣の仕組みなどを扱った政治制度史や、個性ある皇帝・高級官僚・宦官等を善悪二元論的に理解する人物史研究が多く、特定の案件の政治過程を具体的に再現したものは少ない。

本論文は、嘉靖29年（1550）のアルタン=ハーンによる北京城包囲と明朝に対する朝貢再開の要求、これに対する明朝側の対応策の模索から、30年のモンゴル・明間の馬市実施、さらに31年の馬市禁絶に至る政治過程について、一次史料を緻密に解析し、説得的な推論を提示することを通じて、その再現に成功している。すなわち、皇帝、内閣、中央の六部や地方官など、視野に入れるべき諸当事者をほぼすべて取り込んだうえで、重要政策には「親裁」で臨むが、日常的には官僚たちの政策審議の場から遠ざかり、現実を知悉しない嘉靖帝と、皇帝の意向のままでは対処不可能な現場を預かる中央・地方官僚とのせめぎ合いの中で、内閣首輔の嚴嵩が両者の妥協点を探り、事態の軟着陸を図っていた状況を浮かび上がらせている。そして嘉靖年間の内閣は、次の隆慶年間とは異なり、皇帝「親裁」における「顧問官」的性格であったことを指摘している。

これらの成果は、従来の研究水準を大きく乗り越えるものであり、第1回の史学会賞にふさわしい内容をもつ論文と評価できる。今後は、他の時代や地域との比較も意識し、さらに広い展望のもとで研究を進められることを期待したい。

◀ 「史学会賞」 概要

史学会賞トップ ▶▶

トップ

学会情報

お知らせ

雑誌

大会

史学会賞

研究会情報

法人情報

お問い合わせ

このサイトに掲載されているすべての情報を無断で転載することを禁じます。

Copyright © 2014 史学会 SHIGAKUKAI: The Historical Society of Japan All rights reserved.